調査報告

外国語学習に関する意識調査
——学生による質問票調査から[1)]

Students Perceptions of Their Foreign Language Study: A Survey Report

カイト　由利子
KITE Yuriko
沈　国威
SHEN Guowei
杉谷　眞佐子
SUGITANI Masako

This paper is a needs analysis with regards to one private university students' perceptions about their foreign language learning. The assumption is that needs analysis is a prerequisite for any curriculum development and renewal in language learning. This is a partial report of a project, and focuses only on the questionnaire results about learners' perceptions. The results show that the students are positive towards foreign language learning. They seem to agree that they would like to learn more than one foreign language. In their perception of English learning, they feel strongly that English is necessary for communication. However their goals for communication are for rather practical levels such as for shopping, or traveling. Very few academic or professional goals are specified. As far as the second foreign language learning is concerned, their perceptions differ from those in English learning in that they would like to learn the language and culture to enhance cross-cultural perspectives. The report points to the need for more qualitative research in exploring learners' belief in their learning processes. This will subsequently provide rich information in understanding the learners in our foreign language programs. It is hoped that this needs analysis will shed light in shaping multiple perspectives in foreign language programs.

キーワード
ニーズ分析（needs analysis）、学生の意識調査（students' survey）、質問票調査（questionnaire）、複数外国語学習（multiple foreign languages）、主観的外国語学習観（perceptions on foreigu language study）

一　はじめに

外国語教育とニーズ分析

国際化が急速に進む21世紀を迎え、外国語教育の改革を求める声が高まっている。その背景には、学習目標が多様化している現実がある。関西大学でも、外国語教育の改善を求め、全学的合意の下で、外国語教育研究機構が創設され、加えて日本でも最初の、外国語教員養成を専門とする「外国語教育学」専攻の独立研究科が、2002年4月より発足しようとしている。

ところで、学習目標が多様化している現在の外国語教育の改革を考える際、重要な内容として、カリキュラム開発・改革が挙げられる。このカリキュラムの開発・改革には、ニーズ分析が欠かせない[2)]。最近報告されている外国語カリキュラム改革においてはニーズ分析がその前提となっているように見受けられる[3)]。ニーズ分析の定義は多岐に渡るが[4)]、ここでは、Brown (1995) を採用する。

> The systematic collection and analysis of all subjective and objective information necessary to define and validate defensible curriculum purposes that satisfy the language learning requirements of students within the context of particular institutions that influences the learning and teaching situation. (Brown, 1995:36)

Brown (1995) や Dudley-Evans and St. John (1998) によると、ニーズ分析がカリキュラム開発・改革に果たす役割は最近になって認識され始めた（Brown, 1995:35)。Dudley-Evans and St. John (1998) は、1960年代に、理工系の学生が英語を学ぶ場合に、それまで取り扱われていた文学などの分野と違ったサイエンスの分野で必要な英語を検討し始めたのがその始まりであるとしている。White (1988) は概念・機能シラバスにおけるニーズ分析に焦点をあて、それまでの外国語教育が言語（code）を教えることを指摘し、言語と機能（functiuon）の調査・体系化を行った後、そこから言語行動の必要性に応じて学習項目が選択されることとなるため、ニーズ分析は不可欠であるとしている。

しかしながら、ニーズ分析は、ここ30年の間に新しく生まれてきたのではなく、ニーズ分析の内質が変化したと言った方が正確であろう。1970年代までは、大学や教師が自分の経験や直感などから、外国語教育の目的や到達目標、教科（マイクロスキル）内容、教授法、評価法などを決定していた。つまり、インフォーマル（個人的、主観的）なニーズ分析がそこに存在していたのである。ところが、コミュニカティブ・アプローチの台頭により、タクス学習などが外国語学習で重要視されている今日、インフォーマルなニーズ分析をフォーマル（体系的、客観的）に行うことは、カリキュラム開発・改革には欠かせないと認識されている。コミュニカティブ・アプローチには多くの定義があるが、このアプローチにおけるカリキュラム開発で広く認められている見解は、「学習者からのインプットがなく、教師が勝手に選択

した教科内容や到達目標では不十分である」というものである。つまり、学習は教師と学生との相互作用でなければならないと考えられ、学習者の決定権が重要視され、到達目標の設定、評価過程に学習者も参加することが提唱されている。従って、コミュニケーションを重視した外国語学習のカリキュラム開発には、インフォーマルなニーズ分析ではなく、学習者が参加するフォーマルなニーズ分析が不可欠である。

インフォーマルなニーズ分析と、ここで取り上げているフォーマルなニーズ分析には、次の2点において相違点が見られる。

1．データの内容と収集方法

フォーマルなニーズ分析では、データ収集が体系的である。これまでのインフォーマルなニーズ分析では、殆どの場合、教師の主観的判断による学習者のニーズ分析が多かった。これは教師の個人レベルでの直感や経験に頼ったものである。教師個人による分析はフォーマルなニーズ分析においても必要とされるものだが、フォーマルなニーズ分析では、客観的なデータを体系的に収集し、主観的データと同様に扱う。客観的なデータ収集の具体的な方法としては、アンケート、テスト、面接、観察などがある。

2．参加者

これまでのインフォーマルなニーズ分析は、主に教員や教える側が中心で行ったが、フ

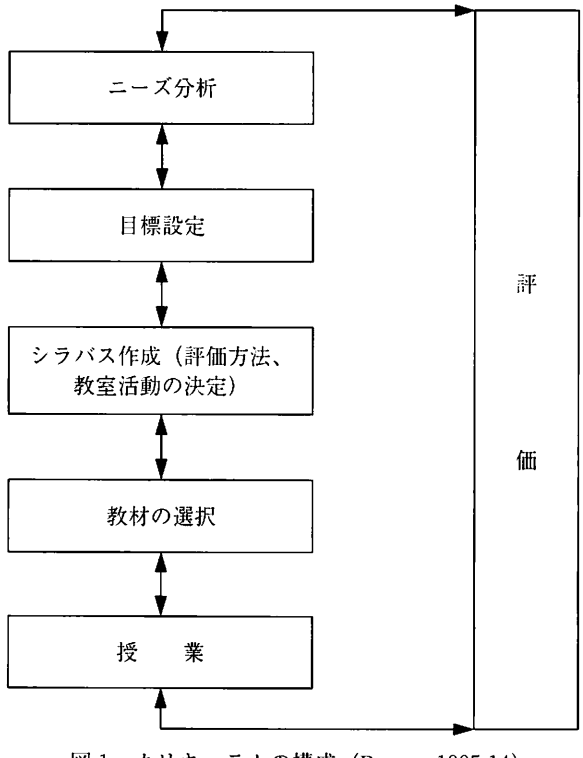

図1．カリキュラムの構成（Brown, 1995;14）

ォーマルなニーズ分析では学習者の参加が大切であると考えられている。この背景には、学習者が何を望み、どのように外国語学習に取り組んでいきたいと思っているかなどを積極的に聞き入れないでは、望ましい学習が成り立たないという学習観がある。

ニーズ分析のカリキュラムにおける位置について見ると、ニーズ分析が最初になされるのが一般的である。ニーズ分析の結果は、目標設定さらにシラバス作成へと繋がる一方、全体的評価にも反映される。詳しくは、上記の図1を参照されたい。

ニーズ分析の領域について、例えば深山他（2000;41）は次のような3つの領域例をあげている。(1)ディスコース・コミュニティーのニーズ、(2)教師および大学のニーズ、(3)学習者のニーズ。(1)と(2)のニーズ分析は、コースで扱うジャンルを分析し、コースの学習目標の設定に役立てるものとしている。つまり、目標分析である。一方(3)におけるニーズの概念は現状分析であり、学習者の個人的情報、例えば習熟度レベル、学習態度、学習スタイルなどの情報を収集し、学習目標と学習者の現実の言語能力との差を明らかにするものである。それらのデータを基にし、学習目標を定め、さらに適当な指導内容を考える。本研究では、先ず、本学の教授者と学習者の外国語学習への目標、態度、学習観を把握（目標分析）し、次に、学習者の現実の言語能力（現状分析）を調査した。

本稿では、そのうち学習者である学生だけに焦点を絞り、学生に関する目標分析と現状分析を報告する。特に次の5点に関してこの報告をまとめた。

(1) 外国語学習歴
(2) 本学の外国語学習環境についての意見
(3) 外国語の習得度
(4) 外国語教育についての意見（英語に関して）
(5) 外国語教育についての意見（第二外国語に関して）

二 研究方法

1. 参加者

今回意識調査に参加した学生は、関西大学に在籍する1部の学生466名（男子287名、女子179名）である[5)]。関西大学の外国語履修については、2つの外国語が必須科目とされている。殆どの学生が英語を第一外国語として履修するが、その他の言語（ドイツ語、中国語など）を第一外国語として履修する学生もいる。第一外国語は8単位取得が必須となっており、殆どの学生は1年次、2年次に外国語必須科目を履修することが多い。今回の調査参加者の殆どは2年次学生である。2年次の学生を対象に選んだ理由は2つある。(1)大学での外国語学習経験歴を持っていること。(2)意識調査の対象としては適切であること。できれば3年次、4年次の学生のように豊富な学習経験を持ち、専門科目も多く履修している学生に参加を希

望したが、これらの学生がまとまって受講している授業科目を確保するのが困難である。したがって今回は、その両方の条件を満たしていると思われる2年次の学生を選んだ。

2. 意識調査質問票の作成

Brown (1985) によると、ニーズ分析におけるデータ収集方法はニーズ分析を誰が実行するかにより、決まってくる。Brownは、その実行者を外部者と内部者とに分けている。内部者がニーズ分析をする場合は、3種類の方法があるとしている。質問票による調査（個人的な情報、意見、見解など、自己判断による習熟レベル、序列選択）、会議による調査（デルファイ方法、報告方式、関心のある小グループ等）、インタービューによる調査（個人、小グループ）の3種類である。今回のニーズ分析研究に調査を担当したのは内部者で、その目的は、本学の学生のニーズを広く探るということにあるため、一般的に広く使用されている質問票調査を用いることにした[6]。

意識調査質問票は、すでに存在する質問票[7]やその他の先行研究などを参照し、試案を作成した。その後、コンサルタントであるゲイズ・スティファン氏の助言を受け（1999年4月）、さらに調査委員で、項目を見直した。意識調査質問票作成後、1999年の5月、6月に予備調査を行った。予備調査は、ドイツ語と中国語クラスをそれぞれ2クラスずつ担当する専任教員に依頼し、実施した。その結果により、設問が不明確であった項目を修正し、項目数の調整などをした。最終的に質問項目はマークシートを使用した多岐選択と自由記述の2種類とした。意識調査質問票（学生用）は付録1を参照されたい。

3. 学生による面接データ収集

質問票調査によるデータ収集を質的に補足するため、数人の学生を選び、外国語教育専攻の大学院生による面接調査も行った。その結果、主観的な外国語学習観、或いは、日本人教員とネイティヴスピーカー教員に対する教授者役割の期待の相違など幾つかの点に関して、種々の発言が得られた。最近、高等学校在学中にアメリカやニュージーランドなど外国での留学・滞在経験のある学生が関西大学にも入学しており、彼等からもまた興味深いデータが得られたが、面接調査に関する報告は、紙面の関係で次の機会に譲りたい。

4. 調査の実施

すでに述べたように、今回の意識調査は、関西大学1部2年次の学生を対象に実施した。質問票の配布と回収は、外国語科目の必須科目の1つである「英語Ⅳ」のクラス担任に依頼した。調査対象は、質問票調査に協力を得られた教師の中から、便宜上可能なクラスを優先した。無作為抽出法による方法も考えられたが、回収率が低いこと、予算の制限などを考慮し、今回は断念した。実施期間は、1999年12月から2000年1月までの3週間である。

配布した調査状数はクラスの在籍数による。学部により、配布数に差がみられる。当初質問票の配布目標は各学部100人ずつに設定したが、クラスの出席情況などを担当教員から聞き、学部によって配布数を変えた。

各学部別の配布数、回収数および参加者の年次別の内訳は、それぞれ表1と表2に示されている。

表1　意識調査に参加した学生数（学部別／人）

学部	法学部	文学部	経学部	商学部	社学部	工学部	総合情報学部[8]
配布数（人）	94	91	98	98	72	134	0
回収数（人）	74	53	78	82	67	107	0
回収率[9](%)	79	58	80	84	93	80	0

表2　意識調査に参加した学生数（年次別／人）

1年次[10]	2年次	3年次	4年次	5年次以上
2	437	22	5	0

5. 意識調査質問票集計と分析

意識調査質問票集計は、研究補助員によって行われた。分析は、質問項目ごとに単純集計とクロス集計を行った。

三　調査結果

ここでは、意識調査結果のうち、関連のある一部の結果を報告する。報告の順序は意識調査質問票に従う。

1. 学生の外国語学習歴

学生の大学入学までの外国語学習歴はどのようなものであるのか。これについて、次のような回答が得られた。

（Ⅱ-1）高等学校で学習した外国語は何ですか。

学習した外国語	人
英語のみ	447
ドイツ語のみ	2
中国語、フランス語、イタリア語、スペイン語のみ（いずれも）	0

殆どの学生が英語のみと答えており、これは、予測された結果である。中国語、フランス語、イタリア語、スペイン語などが第一外国語として履修されることは、今回参加した学生の中にはなかった。高等学校で履修した外国語の数については、ほとんどの学生が、一言語を履修しており、二言語を履修している学生の数は少なかった。（英語と中国語９人、英語とドイツ語３人、英語とフランス語２人）

語学学習に資格試験を取得することは、就職試験などにも有利であり、広く行われている。これらの資格試験に対する学生の関心度と所持している資格を記述してもらった。

2. 本学の外国語学習環境

現在の関西大学のカリキュラム策定では、英語が必須科目になっている。大学に入学し、英語が必須科目になっていることに関して、学生の意見を求めたが、殆どの学生が賛成している。

（Ⅲ-1）関西大学では英語が必須科目になっています。これについてあなたの意見を聞かせてください。

賛成度	人	%
全面的に賛成する	181	40
どちらかといえば賛成する	193	42
あまり賛成しない	60	13
全く賛成しない	22	5

この問いに関して理由を記述した学生は、282人あった。そのうち圧倒的多数の学生が、「英語が必要だから」（126人）と述べている。必要性を認識している学生の中には、「英語の勉強は当然である」、「絶対不可欠である」と強く述べる者もいた。また「英語はあまり好きではないが、英語が社会に出た時に必要」と自分は英語が好きではないが必要性を認めるという意見を述べた者もあった。次に、「英語が公用語／共通語／国際語であるから」（40人）、「役にたつから／実用性が高いから」（18人）と理由を述べたものも多くあった。これらの３つの理由を述べた学生は、65%（184／282人）にもなり、多くの学生が、必要性、実用性を認識していると思われる。関西大学では英語が必須科目になっていることへの反対意見については、39人が理由を述べている。このうち殆どの学生が、「学びたい者が選択をすればよい。」としている。関西大学で、英語が必須科目になっていることについて賛成する学生は、82%にのぼり、約半数の学生が英語の将来の必要性を認識していることは、特記すべきであろう。

さらに関西大学では外国語は２つ選択が必須とされている。学生にもし自由に選択できると仮定し、履修したい外国語の数を聞いた。

（Ⅲ-2）関西大学で、履修したい外国語はいくつありますか。

履修したい言語数	人	%
2つ	225	49
1つ	168	36
3つ	56	12
4つ	11	2
5つ以上	3	1

半数の学生が2カ外国語を履修したいと回答しているが、36%の学生は履修したい外国語は1つとしている。次にどの外国語を履修したいかを聞いた。

（Ⅲ-3）もし外国語が全て選択できると仮定すると、どんな外国語を履修したいと思いますか。履修したい順番に1番から順位を記入してください。

履修したい外国語	人	%
中国語	190	42
ドイツ語	101	22
フランス語	96	21
スペイン語	52	12
ロシア語	6	1
朝鮮語	4	1
その他	3	1

既述の様に、この数値は、協力を得られた英語Ⅳ履修生から出てきた数値であるが、概ね調査時点の第二外国語履修選択の傾向を反映しているといえる。次に第二外国語の選択理由に関して質問した結果、次のような回答が得られた。

（Ⅲ-5）現在選択している第二外国語の一番の選択理由はなんですか。

履修選択した理由	人	%
趣味・教養として	123	27
その言語文化圏に関心があるから	117	26
その言語文化圏に行きたいから	65	14
単位が取りやすいと聞いたから	65	14
将来職業についた時，役に立つから	41	9
その他	28	6
現在の研究・授業に必要だから	12	2

半数弱の学生が、「その文化圏に関心があるから」（26%）、「その言語文化圏に行きたいか

ら」（14%）という積極的な理由をあげている。「趣味・教養として」（27%）という理由も、当該言語文化圏へ何らかの関心があることを前提にしているといえよう。他方「単位が取りやすいから」という理由での選択も14%ある。さらに「将来職業についた時，役に立つから」という実用的な理由も９%見られる。全体には、２ヵ外国語履修という条件下で、かなり積極的に外国語を選択していることが伺える。

ところで最近の学生の選択傾向を見ると、「表現力養成」や「会話」クラスを希望する学生が多い。このようなクラスは、ネイティブスピーカー教員が単独で担当したり、或いは日本人教員と一種のタンデム形式で授業を行うことが多い。また関西大学では、11人の英語の特任講師を採用しており、ネイティブスピーカー教員による授業を体系的に提供している。このようなネイティブスピーカー教員によるクラスへの参加を学生はどのように考えているのだろう。

先ず、履修希望を尋ねたところ、希望する学生数は、そうでない学生の３倍であった（はい：330人（71%）、いいえ：133人（29%））。ネイティヴスピーカーの授業に対する期待として、より正確な発音の学習、聴解力・表現力の育成などと並び「慣れるため」「生活文化を知りたい」「欧米人の考え方を知りたい」「文化観の違いに気づき楽しい」などという意見、さらには、「授業運営が日本人教師と比べ異なる」などの点が指摘されている。他方で「面倒くさい」「大変そう」「外国人と話すと緊張するから」などの理由で、履修を希望しない学生もいる。「実際授業を受けてみると、日本人の先生は文法や暗記などの実務的なことがらや文章に対する能力を身につけさせ、ネイティヴの先生は会話のやり取りとシチュエーションの関係など会話の能力を身に付けさせる授業をする。この２つは全く性質が異なるから、どちらも受講するのが望ましい」という意見もある。ネイティヴスピーカー教員と日本人教員への期待の相違等は、学生の外国語学習観を反映しており、面接でのデータと併せて、今後質的分析をしていかねばならない。

3. 外国語の目標と習得度

学生がどのような目標をもって関西大学で英語を学びたいと思っているのかを聞いた。15項目をあげ、自分の目標に合うものをすべて選択してもらった。その結果は、以下のようである。

（Ⅳ-1）関西大学では、どのような目標を持って英語を学びたいと思いますか。

設問項目	%
2．一般的な会話などを聞いて理解できる	19
3．買い物程度の日常的な会話ができる	13
11．平易な文を書くことができる	10
1．英語の言語・文化・社会について一般的な関心を持つ	9
7．簡単な案内書などが読める	9
14．英語の検定や、資格中級程度を取得できる	8
8．新聞の社会覧が読める	7
6．専門的または実務的な会話ができる	4
10．（辞書を使って）自分の専門に関するレポートが読める	4
12．ビジネスレターを書くことができる	4
13．（辞書を使って）自分の専門に関するレポートを書くことができる	4
4．時事問題などについて話し合ったり議論したりすることができる	4
5．自分の専門についての講義・講演が理解できる	4
15．英語は必要ないので、勉強しなくてよい	0
	100

まず特記すべきは、「15．該当言語は必要ないので、勉強しなくてよい」を選択した学生は2人だということである（0％）。学生は、2．で見たように、英語に関しては、勉強しなければならないと認識しているようだ。次に学習目標を見ると、次の3点に集中している。まず4言語技能に関して、一般的会話（話す聞く目標）、案内書や社会欄（読む目標）、平易な文（書く目標）を挙げている。2番目に知識としての外国語として、言語・文化・社会についての関心を示し、3番目に、実用的な目標として検定、資格取得への関心を示している。しかし、専門的な分野での学習目標に関しては、自分の目標として挙げた人は少なく、いずれも3％か4％にとどまっている。

これらの傾向は、関西大学の特有の傾向ではなく、他大学で行われた日本人大学生の意識調査の結果にほぼ類似している[11]。中学校・高等学校で6年間英語を勉強し、さらに大学で2年間履修し、合計8年間の学習の到達目標として果たして何を意味するのか。8年間の到達目標としては、理想的とは思われないが、その原因は何か。学生達が何故このような目標を選択したのかはこれからの研究課題である。さらに、大学での外国語教育の目標設定に、何が必要であるのか。学生と教員（専門が外国語教育、またはそれ以外の何であれ）にとって、大きな問題を提示している。

次に、自分の英語のレベルについて、学生はどのように自己評価しているのだろうか。同じ15項目を使用し、選択してもらった。結果は次の通りである。

（Ⅳ-2）自分の英語はどのレベルと思いますか

設問項目	%
11. 平易な文を書くことができる。	23
3．買い物程度の日常的な会話ができる。	17
2．一般的な会話などを聞いて理解できる。	16
7．簡単な案内書などが読める	14
1．英語の言語・文化・社会について一般的な関心を持つ	13
10.（辞書を使って）自分の専門に関するレポートが読める。	5
14. 英語の検定や、資格中級程度を取得できる。	5
13.（辞書を使って）自分の専門に関するレポートを書くことができる。	1
8．新聞の社会覧が読める。	1
9．文学雑誌が読める。	1
12. ビジネスレターを書くことができる。	1
4．時事問題などについて話し合ったり議論したりすることができる。	1
6．専門的または実務的な会話ができる。	0
5．自分の専門についての講義・講演が理解できる。	0
15. 英語は必要ないので、勉強しなくてよい。	0
	100

学生の自己判断による英語の習得度について、まず上位５項目（11、３、２、７、１）は、前述の学習目標の上位項目であることが挙げられる。つまり自分が習得していることは、そのまま学習目標にもなっている。これは、何を意味するのであろうか。学生一人一人の相関がでていないので、これだけで判断はできないが、全体の数から見ると、学生の現在の英語習得と同じような領域で、学習をさらに進めたいと認識しているという傾向があると言える。さらに、自分が新しく（自分がそのレベルに達していないので）目標として掲げたことは、英語検定や資格の取得が挙げられる。今回の調査の一部であった面接のデータや検定、資格の取得を目標としたコースに人気があることなどを考え合わせると、納得がいく結果である。

しかし上述のⅣ-1 の学習目標とクロス集計した結果からは、現有の英語力をさらに、専門書を読み、レポートを書くまで高めたいという要望は窺えなかった。

4. 外国語についての意見

学生には、英語と第二外国語について意見を聞いた。選択肢は次の4つである。

(1)あてはまっている

(2)どちらかと言えば当てはまっている

(3)どちらかと言えば当てはまらない

(4)あてはまらない)

回答の百分率を算出し、カイ二乗値を求めた。危険度を .01 に設定し、そのうち当てはまっているか ((1)当てはまっている、(2)どちらかといえば当てはまっている両方を含む)、当てはまっていない ((4)当てはまっていない、(3)どちらかといえば当てはまっていない両方を含む)で有意が見られる項目を中心に報告する。質問項目は「　」の中にいれ、項目順序の番号をそのまま引用した。ここでは、英語学習に関することを述べる。

4.1 英語の目標観

英語の学習目標について学生の意見を求めた。質問項目は2つあり、「11. 英語を用いている国の友達を作り、色々な人と親睦をはかり、交流したい」と「25. 英語を用いている国の文化を理解し、書物、映画、文学などの理解に役立てたい」である。これらの両項目はそれぞれ賛同率が74.4%（χ^2 (3)＝111.05、p＜.01)、74.2%（χ^2＝109.11 p＜.01）と有意差が見られた。英語学習の学習目標について、「19. 自分は、将来、英語を使って仕事をする可能性が大いにあると思う」という質問を問いかけたが、これは、有意差はみられなかった。既に述べたように、かなり多くの数の学生が将来英語の必要性を認めているが、19のような、英語を使って何かをするという目標に対する認識は薄いようである。

4.2 英語ができるということの意味は

英語の学習目標に関連のあるこの質問については、2つの傾向がみられる。まず「32. 英語ができるということは、英語でネイティブスピーカーとコミュニケーションができることを意味する」という質問で、半数の学生（49.5%）があてはまると回答しており、どちらかといえば当てはまるをいれると、83.3%の学生が、賛同している（χ^2 (3)＝205.78、p＜.01)。

一方、強く否定している項目は、「6. 英語ができるということは、英語から日本語に翻訳することを意味する」で、74.4%が当てはまらないとしている（χ^2 (3)＝119.02、p＜.01)。なお、英語で読み書きすることについては、「16. 英語ができるということは、自分の関心のある分野で、雑誌などを理解し、簡単な手紙などを書くことを意味する」（χ^2 (3)＝0.22、n. s.）と「20. 英語ができるということは、自分の専門領域で、英語の論文、学術雑誌を理解し、英語で論文などを書くことを意味する」（χ^2 (3)＝1.94、n. s.）の2項目について、どちらとも有意差は見られなかった。

英語に関して言えば、学生の認識は、英語ができるということは、ネイティブスピーカーとコミュニケーションができることであり、英語を日本語に翻訳できる力ではないようであ

る。学生にとって関心の高いクラスは、ネイティブスピーカーを教師として、聞き、話すというオーラルコミュニケーションができるクラスのようである。

4.3 英語をマスターするためには

それでは、英語をマスターするために、学生は何が必要であると思っているのかを探った。あきらかに賛成が多かったのは、下記の5項目であった。いずれも有意差が見られた。

設問項目	%
22. 自信を持たなければならない	83
29. 英語をマスターするには、教室外での練習をしなければならない	80.4
3．教室外での練習をしなければならない	79.1
8．英語をマスターするには、苦労して頑張らなければならない。	77.2
2．ネイティブスピーカーの先生に教わらなければならない	73.4

予想できたとは言え、興味深いのは、英語をマスターするためにネイティブスピーカーの先生に教わることに強く賛同していることである（χ^2 (3)＝99.20、p<.01)。もう一点は、いかに自信と努力が必要であるかを認識していることである（項目3、22、29)。ちなみに、有意差が見られなかった項目には、「15. 英語をマスターするには、文法の規則を規則として覚えなければならない」、「33. 英語をマスターするには、書物、新聞などからの一般知識を深めなければならない」があった。英語の学習は、言語技能の訓練だけではなく、言語と密接に関連のある一般知識とか、言語の背景にある文化理解などが深く関わってくる。このような認識は英語教育のカリキュラムの中でどのように位置づけ、学習目標にどのように関連づけるべきかは、重要な課題である。

4.4 コミュニケーションについて

学生は、今やオーラルコミュニケーションが、より役に立つと思っているようである。「13. 英語の読み書きの方が、話したり聞いたりすることより役たつと思う」に、82.4%が賛同し、有意差が見られた（χ^2 (3)＝193.55, p<.01)。さらに、日本人が英語でコニュニケーションすることについては、必要であるという強い意見もでた。「23. 日本人なので、英語でコミュニケーションができることは必要でない」に不賛同率は81.2%（χ^2 (3)＝199.62, p<.01）であった。これは、上述の4.2とあわせて考えると予測された結果である。日本のような外国語環境、つまり90%以上の人が日本語で生活する国において、英語の必要性を認識しているということは、注目すべきである。

ところで注目したいのは、「5．大学の勉強と英語でコミュニケーションを勉強することは、別のことだと思っていることである」に70.8%が賛同し、有意差が見られた（χ^2 (3)＝80.28, p<.01）ことである。これは、4.3で見たように、「4．英語をマスターするには、教室外での

練習をしなければならない。」賛同率80.4%（χ^2 (3)=158.28, p<.01）と合わせて考えると、興味深い。これまで見てきたように、学生は、ネイティブスピーカー教員に教わり、聞く話すコミュニケーションこそが英語ができることであると認識し、一般的な会話などを聞いて理解でき、買い物などの日常的な会話ができることを到達目標に挙げている。しかも、それらは、大学の勉強とは異なるという傾向は、どの様に解釈したらよいのか。学生の大学の授業に関する意識は、複雑であり、このような質問票のみで解釈はできない。このような全体的な数的調査を踏まえて、さらに質的に研究されるべきである。

4.5 コミュニケーション上達のために

コミュニケーション上達については、2つ項目を挙げた。そのうち、「24. 英語のコミュニケーション上達には、ネイティブスピーカーに教わることが必要である」については、78.5%賛同し、有意差が見られた（χ^2 (3)=149.88, p<.01)。「3. 英語のコミュニケーション上達には、文法と単語の習得が必要である」については、有意差は見られなかった。コミュニケーションについては、定義がなされていないため、不明瞭な点もあるが、スピーキングやリスニングのイメージが強く、さらに、本学では、英語のネイティブスピーカーによるクラスは、「コミュニケーションクラス」と呼ばれているので、学生にとっては、同一視することが多いかもしれない。次に、4言語技能に関する意見を、1つずつ見てみよう。

4.6 リーディング上達のためには

リーディング上達に最も効果的である方法として、「10. 訳読」、「30. 英語基礎の文法を勉強すること」、「14. 多く読むこと」の3つの項目を設けた。このうち、多く読むことだけが、学生の賛成する項目（77.6%賛同）となり、5%水準で有意差が見られた（χ^2 (3)=4.95, p<.05)。学生との面接データによると、多くの学生が訳読のクラスに不満足に思っているようであるし、高等学校と変わりない授業方式にも失望しているなどの報告がある。このような状況を鑑みると納得できる結果である。

4.7 ライティング上達のためには

ライティングについては、2年次の英語Ⅲの選択の一部として開講されているのみで、開講数が少ない。英語Ⅳを取得している学生にとって、ライティングのクラスは、取得していないことが多いと思われる。「17. 日本語から英語への翻訳が最も効果的である」、「26. 英語の本・雑誌・新聞を多く読むことが最も効果的である」。「31. 基礎の文法を勉強することが最も効果的である」の3項目を挙げた。しかしいずれも、有意差は見られたかった。

4.8 語彙を増やすためには

英語の語彙を増やすために、次の3項目を設問した。「1. リーディングをするのが最も効果的である」「9. 単語を毎日覚えていくことをしなければならない」「12. 日本語でも書物などから語彙を増やしていくことが大切である」。これらの3項目のいずれも、有意差は見られたかった。

4.9 英語の学習に関する希望

英語を勉強するにあたっての希望に関して、「18. インターネットなどを使って、英語で情報交換や、交流をしたい」は、66.7%賛同し、有意差が見られた（$\chi^2(3)=51.00$, $p<.01$）。また「28. 英語の学習のためのホームステイや留学の機会があれば是非したい」については、半数の学生が賛成し、さらに四分の一近くの学生がどちらかと言えば当てはまっていると回答した（$\chi^2(3)=79.28$, $p<.01$）。

これまで細かく分析結果を見てきたが、ここで、簡単にまとめたい。英語については、既習外国語であるため、学生の英語に関する意見も多様化している。しかしその中で、2つの傾向が見られる。まず、英語の学習が大学の勉強において、必要であると強く認識している点である。例えば、（Ⅲ-1）で英語が必須科目であることに対して学生は82%賛成している。さらにこの項目に関しての学生の記述を見ると、多くの学生が強い賛同の意見を述べている。中には、数は少ないが、『専門分野を勉強するときに必要になるから』『外国語の文献を読むのに少なくとも英語は必要』などと、英語を使って、専門領域に活用する必要性を認識している学生もある。ある学生は英語を必須とすることに関する理由として、『大卒レベルの知識階級には、英語は当然、習得事項であると認識されており、また英語が使えなければ今からの時代において社会の実践力として疑問視される可能性がある』と述べている。さらに、（Ⅳ-1、Ⅳ-11）における意識調査でも英語の必要性は強くでている。「15. 英語の勉強が必要でないので、勉強しなくてよい」に賛同した学生は0%であった。自分が英語の得意、不得意や、習得度にかかわらず、英語の今日の役割を自覚し、必須にすべきであると述べていることから、英語の必要性に賛同する意見は強いと言えよう。

次に、英語の到達目標は一般的な会話などを聞き、買い物程度の日常的な会話ができることであり、英語ができることは、ネイティブスピーカーである教師に学び、英語を聞き、話すことであると認識している。学生は英語をネイティブスピーカー教員と生の英語に触れ、さらに、読み書きより聞く話すクラスにより関心を示している。『会話を重視した授業を必須科目として創設すべき』と述べた学生もある。このような一般会話志向の反面、英語を駆使して専門領域に活かす、例えば、英語でゼミに関する情報を得るとか、英語でプレゼンテーションするとかに関する認識はかなり低い。

この2つの傾向は何を示唆するのか。英語の必要性が否めない国際化した今日の状況で、既習外国語であるがために、英語に関する学生の関心、要望も複雑である。まれに、『研究室配属になった時に英語の論文を読むだけの力は必要であるし、将来的にも研究もしくは技術職となったときにも必要となるから』という学生の声に反映されるように、英語の学習と自分の専門領域を関連されている意見がある。しかし、このような学生は例外と言わざるを得ない。大学における英語教育の目標をどこに、また誰が設定するのか、学生との対話、外国語教育専門教員とその他の専門教員との対話の中で進められるべきだろうし、カリキュラム

改革に課された、問題は大きい。この課題については、教師の意識調査の結果報告とあわせて、次回に検討したい。

5. 第二外国語の場合

5.1 第二外国語学習の目標観

第二外国語学習の目標に関する質問の回答は以下のようである。先ず「2．当該国の友達を作り、親睦・交流を図りたい」については(1)(2)66.7%、(3)(4)33.4%で、肯定する学生数は有意に多い（χ^2 (3)=50.67, p<.01)。「32．文化を理解し、書物・映画、文学などの理解に役立てたい」に対しても、61.5%が肯定、33.6%が否定で、やはり有意に肯定意見が多い（χ^2 (3)=23.56, p<.01)。「インターネットを使い情報交換を行いたい」に対しては、55%が肯定している。他方、「4．第二外国語を使い仕事をする可能性」を肯定する学生は全体で26.7%（ドイツ語66.0%、フランス語77.9%、スペイン語68.6%、中国語75.7%）で、その可能性を否定している（χ^2 (3)=98.63, p<.01)。ここから第二外国語学習目標として、国際化が進展する中で、当該言語文化圏へ関心をもち、人々と交流したい、という、いわば「国際化時代を生きる個人としての教養」という側面が指摘できるのではないだろうか。

5.2 第二外国語ができることの意味は

「第二外国語ができる」ことの内実を学生はどのようにみているのであろうか？「30．第二外国語ができるということは、第二外国語でネイティヴスピーカーとコミュニケーションができることだ」を肯定する学生は81.3%と多い（χ^2 (3)=177.35, p<.01)。「31．自分の関心の或る分野で雑誌などの理解ができる」は、66.4%が肯定する（χ^2=48.47, p<.01)。

他方「27．日本語への翻訳ができること」を肯定する学生は41.9%、その見解を否定する学生は58.1%である（χ^2=11,58, p<.01)。「4．専門領域での論文・学術雑誌の理解」は44.5%が肯定であった（χ^2 (3)=5.42, p<.05)。「19．読み書きの方が、話したり聞いたりするより役に立つ」に関しては、肯定32.2%、否定67.7%と否定する学生が多く、有意差が見られた（χ^2 (3)=57.18, p<.01)。

今回の調査結果からは、第二外国語に対しても、英語と同様、直接コミュニケーション能力の育成を求める学生が多いことが明らかになったと言えよう。しかし同時に、雑誌等を通じて、目標言語文化圏の情報を得ることへの関心もある。このような結果は、語種により相違がみられるのだろうか？すでに述べたように今回の調査では、第二外国語履修者数の相違が大きいので、ここでは、ロシア語と朝鮮語以外について見ていく。またこれらの結果は、あくまでも傾向に過ぎないことを、先ずお断りしておきたい。

外国語能力の内実や目標観に関する解釈に見られる語種別の傾向は、以下の通りであった。

(Ⅵ-30) 第二外国語ができるということは、第二外国語で
ネイティヴスピーカーとコミュニケーションができることだ。

	当てはまっている%	当てはまっていない%
ドイツ語	76	24.0
フランス語	86.3	13.7
スペイン語	94.0	6.0
中国語	79.3	20.7

(Ⅵ-2) 第二外国語を用いている国の友達を作り、色々な人と親睦をはかり、
交流したい。

	当てはまっている%	当てはまっている%
ドイツ語	53.0	47.0
フランス語	73.7	26.3
スペイン語	84.6	15.4
中国語	65.3	34.7

(Ⅵ-31) 自分の関心の或る分野で雑誌などを理解し簡単な手紙をかくことができる。

	当てはまっている%	当てはまっていない%
ドイツ語	60.6	39.4
フランス語	63.2	36.8
スペイン語	76.0	24.0
中国語	67.2	32.8

この結果から、第二外国語に対する学生の学習目標が、いわゆる翻訳を中心とした受容能力から、英語と同様、表現力養成や対面コミュニケーション能力育成へとかなり比重が移っている傾向が、フランス語、スペイン語を中心に語種を超えて改めて確認できるようである。

5.3 第二外国語をマスターするためには

第二外国語を習得するために学生が必要と考えていることがらに関しては、次のような項目が重要視されている。

設問項目	%
20. 自信を持たねばならない。	79.8
1．第二外国語の勉強には、先生が文法と語彙を説明せねばならない。	78.8
9．苦労してがんばらなければならない。	77.2
8．教室外で練習せねばならない。	72.4
5．第二外国語をマスターするには、ネイティヴスピーカーの先生に教わらなければならない。	69.7
6．文法の規則を、規則として覚えねばならない。	67.8
16. 書物・新聞からの一般的な知識を深めねばならない。	64.5

何れも有意に肯定意見が強い。またネイティヴスピーカー教員の授業が少ないにも拘らず、かなり高い期待があることが窺える。これは既述の口頭での対人コミュニケーション能力育成を目指す学習目標観と関連しているのであろうか。他方で、初習外国語であることが多いせいか、日本人教員が学習過程に介在することの必要性など、英語とは異なった認識が見られる。自信や自己努力の必要性への認識は、英語学習観と共通している。

5.4 第二外国語学習観に見られる特徴

上に述べたように、第二外国語学習においては、コミュニケーション能力を重視しつつ、文法や語彙の学習を重視する傾向が見られる。学習方法に関する質問では、英語と比較すると、文法と語彙の説明に関しては次のような相違が得られた。

（V-7, VI-1）外国語の勉強には、先生が文法と語彙を説明しなければならない。

	当てはまっている%	当てはまらない%
第二外国語	78.7	21.1
英語	37.2	62.7

しかし、一般に文法知識を重視する傾向は強いようで、口頭であれ、書面であれ、コミュニケーション能力との相関に関して、第二外国語との相違はあまり見られない。

（V-3, VI-6）コミュニケーションの上達には文法と単語の習得が必要である。

	当てはまっている%	当てはまらない%
第二外国語	69.3	30.6
英語	64.2	36.8

表現力と受容能力との相関では、次のような結果が得られた。

（V-31,Ⅵ-17）ライティングの上達のためには、基礎の文法を勉強することが効果的である。

	当てはまっている%	当てはまらない%
第二外国語	71.4	28.6
英語	72.8	27.3

（V-30,Ⅵ-10）リーディングの上達には、基礎の文法を学習することが最も効果的である。

	当てはまっている%	当てはまっていない%
第二外国語	65.5	34.5
英語	55.3	44.7

この結果は、英語であれ、第二外国語であれ、読解の際よりも、口頭・書面を問わず意見表明など表現力が求められる時、学生は、文法知識の重要性をより強く認識することを示している。

学習目標としてコミュニケーション能力重視は明らかであり、それは受容と表現の総合的な運用力を必要とする。それゆえに、学習方法として語彙学習と並び、機能的観点からの文法学習を求めていると解釈できるのではないかと思われる。

5.5 第二外国語選択の動機と学習観

今回のアンケート調査では、Ⅲ-5で、第二外国語の語種選択に際し、その主要動機を尋ねた。それに対する全体の回答は、既に紹介した。そこでも明らかなように、「趣味・教養」「当該文化圏に関心がある」「その国へ行きたい」など、積極的な関心理由を述べる学生が、67%と多い。他方で、授業の実際を確認することなく「単位が取りやすい」という噂に基づく学生もいるようである。語種によりどのような学生の選択動機が見られるのであろうか？

	1.趣味・教養%	5.言語文化へ関心%	3.行きたい%	2.職業で有益%	6.単位の噂%	3.研究上必要%
ドイツ語	36.0	17.0	15.0	11.0	5.0	10.0
フランス語	41.1	28.4	22.1	1.1	0.0	0.0
スペイン語	17.6	33.3	17.6	7.8	21.6	0.0
中国語	18.4	27.4	8.9	12.6	25.3	0.5

既に述べたように、この結果はあくまでも傾向的な相違である。しかし再度確認できるのは、第二外国語学習に対し、一般に、学生は積極的な動機をもっていることで、高等学校時代に英語圏での滞在を経験し、大学では英語圏以外の国で旅行や語学滞在を試みる学生も増

えている。いわゆる専門領域の研究のためという動機は極めて少なくなったが、他方で、グローバル化時代に対応して、英語圏以外の言語・文化へ関心を抱き、国際的な視野を広めるための機会として、第二外国語学習は、新たな位置づけを得ているように思われる。このような学習観は、既述の学習目標での対人コミュニケーション能力の養成からも裏付けられよう。また既述のように、Ⅲ-2「大学で履修したい外国語数」に対し、「1外国語」という回答が168名であったのに対し、「2～3外国語」が、281名という結果とも対応しているようである。さらに今回は割愛する面接での発言からも、複数外国語学習への関心が窺えた。このような学生の第二外国語学習観に対し、教授者側がアプローチを工夫し、英語圏以外の視点に基づく複眼的思考の促進や、そのような情報入手のリテラシーの基礎を作る機会として、また、国際的な視野と教養を持つための機会へと展開できるか、問われているといえよう。

最後に概念知識と言語知識の相関に関する問題について述べる。一般に読解、聴解、表現力をはじめコミュニケーション能力や外国語運用力は、単に言語知識のみで構成されるものではない。言語知識のいわばスキルに対し、コンテントとしての概念知識が必要であり、コミュニケーション能力のなさは、むしろコンテント不足に起因することも少なくない。しかし外国語学習の過程で、学生がその問題に気づくのは、或る程度、スキルの学習が進んだ段階であることも多い。「Ⅵ-16.外国語をマスターするには、書物、新聞などから、一般知識を深めなければならない」という意見への回答は次のようになっている。

	当てはまっている%	当てはまらない%
第二外国語	64.5	35.5（$\chi^2(3)=37.63$, $p<.01$）
英語	68.5	31.4（$\chi^2(3)=63.02$, $p<.01$）

この結果から、既習言語である英語学習においては、その認識はやや高いが、第二外国語学習においても、その問題は認識されているといえよう（何れも $p<0.1$）。大学での第二外国語学習では、今後、スキルとコンテントをどのように構造化していくべきかが、課題であると言えよう。

6. 今後の課題

今回の調査の目的は、従来教授者が主観的に想定する傾向にあった外国語学習のニーズを、より客観性を求め学習者の視点から調査することにあった。それは今後の外国語教育やカリキュラム改革を考えるうえで、外国語学習過程に学習者が主体的に参加することが不可欠であると考えるからである。それはとりもなおさず、学習の当事者・主体として自己を認識し学習に対して責任感を持つ態度の形成にも通じる。

そのような観点から今回得られた結果を見ると、既述のように「英語学習は必要」とする

認識が高い一方で、その知識を使い自己の思考や行動力を広げる、という観点はまだあまり認識されていないように思われる。このような結果は、例えば、総合情報学部で得られた結果とも比較できよう（山本他1997、142-143)。そこでは、学習者の希望する英語能力として、「日常レベルでの会話能力」が「研究やビジネスへの応用」を志向する傾向よりはるかに強いことが示されている。また話題としては、映画・音楽など、総じてポップカルチャーへの関心が高いことが示されている。しかし同時に、TOEFLの上位得点群や、女子学生では「英語で専門領域で討論できる」など応用志向型がより強く見られる、という結果が得られており、重要である。

外国語学習のニーズに関して学習者の視点から見ると、コミュニケーション能力の養成が挙げられているが、他方で、買い物などの日常的な会話や娯楽面での外国語知識の運用が意識される傾向にあり、"communication for what?" という問いかけをしたくなるような学習観であるともいえよう。いわばスキルの面が強調され、コンテントの面への目標意識があまり自覚されていない、という印象を受ける。このような学習観は、英語にしろ、第二外国語にしろ、マスターするためには「自信をもたねばならない」と言う項目に高い評価が与えられていることと無関係でないように思われる。何れにしろ、英語のまとめでも述べたように、今後、質的調査でさらに追究されるべき点であろう。

今回の調査は、先行研究を参考に、より客観的なニーズの分析を目標としたものであるが、質問票調査に基づくもので、断定できるデータではなく、まだ基礎資料の一部である。今後面接調査でのデータを含め、質的調査を続ける必要があるだろう。さらに、学生が卒業後どのようなニーズに直面しているかを調査することも課題として挙げられる。次回は教員調査のまとめを行う予定であり、それと併せて考察すると、今回の結果についてさらに解釈を深められるかもしれない。外国語教育の改革には、学習者の主体的認識と参加が重要であり、そのためには、彼等の学習経験とその主観的学習観を把握し、そこから実態に基づいて改革の方法を築いていくことが求められよう。国際化する社会では、リングアフランカとしての英語の学習、異文化への対応能力育成や複眼的思考力育成に文化や価値観の多様性と結びついた第二外国語の学習など、それぞれの特徴を活かした複数外国語の学習が必要である。グローバル化する社会で活躍できるような社会人の養成を目指すためにも、今後、外国語学習観や、学習過程、学習ストラテジー等に関する質的研究を深めていく必要があると思われる。

謝辞

今回の研究に関して、下記の方々より多大なる支援を得た。関西大学大学院文学部研究科博士後期課程森田泰介氏、質問票調査に賛同して下さった英語Ⅳ担当の先生方々、質問票の回答、面接に参加してくれた学生の方々である。ここに記して感謝の意を表する。

参考文献

Anderson, G, Bodner, D., Rambo, E., Riedel, J., and Savage, L. (2000). The coordinated English language program at the School of policy Studies. *Journal of Policy Studies, 9*, 29–64.

Baker, C. (1997). Survey methods in researching language and education. In N. E. Hornberger & Corson, D. (Eds.), *Encyclopedia of language and education, Vol.8., Research methods in language and education* (pp.35–46). Dordrecht: Kluwer Academic publishers.

Barrow, J. (1993). Students' language education needs analysis: results and discussion. *The Bulletin of Osaka International University for women, 19*, 227–239.

Barrow, J. (2000). Using qualitative research in curriculum renewal and innovation. *The Bulletin of Osaka International University for women, 26*, 105–112.

Berwick, R. (1989). Needs assessment in language programming: from theory to practice. In R. K. Johnson, (Ed.), *The second language curriculum* (pp.48–92). Cambridge: Cambridge University press.

Brindley, G. (1989). The role of needs analysis in adult ESL: programme design. In R. K. Johnson, (Ed.), *The second language curriculum* (pp.63–78). Cambridge: Cambridge University press.

Brown, J. D. (1995). *The elements of language curriculum: A systematic approach to program development.* Boston, MA: Heinle & Heinle Publishes.

Brown, J. D. (2001). *Using survey in language programs.* Cambridge: Cambridge Unviersity Press.

Butler, P. et al. (1998). The IEP in transition: Intermediate course goals. *『言語教育研究センター研究年報』, 1*, 3–31.

同志社大学言語教育研究センター研究委員会・カリキュラム委員会.（編集）.（2000）. *自己点検・評価報告(3)1998年度授業評価, 1999年度授業評価・カリキュラム評価.* 同志社大学言語教育研究センター

札野寛子.（1991）. 工学系専門教育課程に求められる英語能力の調査とその分析. *金沢工業大学研究紀要, 32*, 99–112.

Johnson, K. (1982). *Communicative syllabus design and methodology.* Oxford: Oxford University Press.

Jordan, R. R. (1997). *English for academic purposes.* Cambridge: Cambridge University Press.

Long, M. H. (in press). Methodological issues in learner needs analysis. To appear in M. H. Long (Ed.), Second Language Needs Analysis. Cambridge: Cambridge University Press.

Lorber, M. A. (1996). *Objectives, methods, and evaluation for secondary teaching.* Boston, MA: Allyn and Bacon.

深山晶子、野口ジュディ、寺内一、笹島　茂、神前陽子.（2000）. *『ESPの理論と実践。これで日本の英語教育が変わる』*. 東京：三集社

Munby, J. (1978). Communicative syllabus design: A sociolinguistic model for defining the content of purpose-specific language programs. Cambridge: Cambridge University Press.

Nunan, D. (1988). *The learner-centred curriculum.* Cambridge: Cambridge University Press.

Nunan, D. (1989). *Designing tasks for the communicative classroom.* Cambridge: Cambridge University Press.

大高博美.（1998）. 英語のスピーキング指導―理論と実践―. *『言語と文化』*. 関西学院大学言語教育センター, 1. 69–84.

下村　誠二.（1983）. *昭和56、57年度東京大学共同研究「東京大学における外国語教育」研究結果報告*

書

White, R.V. (1988). *The ELT curriculum: Design, innovation and management.* Oxford: Blackwell.

Yalden, J. (1987). *The communicative syllabus.* Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

山本英一、宇佐見太市、北村裕、竹内理、八島智子、吉澤清美. (1997). 関西大学総合情報学部における英語教育——Needs Analysisと教材開発——. *『語学ラボラトリー平成9年全国研究大会発表論文集』*、pp.141-144.

吉島茂. (1992). 第三次「外国語の学習に関するアンケート」集計報告Ⅵ—1992年度新入生—. *『言語文化センター紀要』*, 13, 99-137. 東京大学教養部付属言語文化センター

注

1）本稿は、関西大学平成12～13年度学術研究助成基金（共同研究）による調査研究「大学における外国語教育のあるべき姿に関する総合的な研究」の一部である。

2）Berwick, 1989; Brindley, 1984; Brown, 1995; Jordan, 1997; Johnson, 1982; Lorber, 1996; Munby, 1978; Nunan, 1988, 1989; White, 1988; Yalden, 1987を参照。

3）Anderson et al., 2000; Barrow, 1998, 2000; Butler et al., 1998; 同志社大学言語文化教育研究センター研究委員会・カリキュラム委員会, 2000; 札野, 1991；大高, 1998; 山本他, 1997を参照。

4）Pratt, 1980; Nunan, 1989; Richards, Platt and Weber, 1985を参照。

5）昼間開講のクラス。

6）質問票調査研究方法に関しては Long (in press), Brown (1985; 1995), Baker (1997) などを参照されたい。

7）同志社大学言語教育研究センター研究委員会・カリキュラム委員会、2000；下村, 1983；吉島, 1992。

8）総合情報学部は、カリキュラムが千里山キャンパスと異なるため、今回は対象外とした。

9）意識調査をした当日の出席率とほぼ同一と考えられる。

10）1年次の学生が該当クラスに在籍することは規定上なく、記入者の間違いと思われる。

11）Butler et al., 1998.

付録1〈外国語教育に関する調査（学生用）〉

外国語教育に関する調査（学生用）

関西大学文学部
関西大学の外国語教育に関する共同研究グループ

1999年12月

関西大学において、1999年より全学の外国語教育を担当する「外国語教育研究教室」が設立されました。2000年4月からの機構としての発足にあたり、21世紀における本学の外国語教育のあるべき姿をテーマにした共同研究計画が、当機構移籍予定教員によってスタートいたしました。この調査は、共同研究の一環であり、本学教員と学生の外国語教育についての意識を明らかにし、今後の外国語教育をより豊かなものにするため行われるものです。結果は、電算機による統計処理が行われ、カリキュラム改善の基礎資料となります。この調査はこの目的以外に使用することは決してありません。正確にありのままをお答え頂ければ幸いです。

各調査項目の解答は、記入式の場合とマーク式の場合があります。記入式の場合には、質問紙に直接解答を記入して下さい。マークするよう指定がある場合には、マークシートに解答を記入して下さい。マークする場所を間違えないように注意して下さい。

Ⅰ．あなた自身についてお答え下さい。

Ⅰ-1.性別　（1にマーク）
①男性　②女性

Ⅰ-2.部別　（2にマーク）
①1部　②2部

Ⅰ-3.学部　（3にマーク）
①法学部　②文学部　③経済学部　④商学部　⑤社会学部　⑥工学部　⑦総合情報学部

Ⅰ-4.年次　（4にマーク）
①1年次　②2年次　③3年次　④4年次　⑤5年次以上

Ⅱ．あなたの外国語学習歴についてお答え下さい。

Ⅱ-1.高等学校で学習した外国語は何ですか。（5にマーク）
⑩を選んだ場合には、具体的な内容をカッコ内に記入して下さい。
①英語のみ　②ドイツ語のみ　③中国語のみ　④フランス語のみ　⑤イタリア語のみ
⑥スペイン語のみ　⑦英語とドイツ語　⑧英語と中国語　⑨英語とフランス語　⑩その他（　　語　）

Ⅱ-2. あなたが学校以外で自主的に英語を学習した際、利用した場所・方法は以下のうちのどれですか、枠内に当てはまるものの番号を全て記入して下さい。（複数回答可）
⑩を選んだ場合には、具体的な内容をカッコ内に記入して下さい。

①英語圏で　②塾・語学学校で　③個人教授による　④テレビ・ラジオで独習　⑤外国語新聞・雑誌を購読
⑥CD・テープなどで独習　⑦ネイティブスピーカーなどを通じて⑧参考書などで独習
⑨正規の課程以外では英語を学習していない　⑩その他（　　）

II-3. あなたが学校以外で自主的に学習した外国語は何ですか。枠内に当てはまるものの番号を全て記入して下さい。（複数回答可）⑩を選んだ場合には、具体的な言語をカッコ内に記入して下さい。

①ない　②英語　③ドイツ語　④中国語　⑤フランス語
⑥スペイン語　⑦ロシア語　⑧イタリア語　⑨朝鮮語　⑩その他（　　語）

II-4.　上のII-3で答えた外国語を学習した際、よく利用した場所・方法は以下のうちのどれですか。下の枠内にあてはまる項目の番号をすべて記入して下さい。（複数回答可）
⑩を選んだ場合には、具体的な内容をカッコ内に記入して下さい。

①その外国語の言語圏で　②塾・語学学校で　③個人教授による　④テレビ・ラジオで独習
⑤外国語新聞・雑誌を購読　⑥ＣＤ・テープなどで独習　⑦ネイティブスピーカーなどを通じて
⑧参考書などで独習　⑨正規の課程以外では勉強していない
⑩その他（　　）

II-5.語学に関する資格・試験のうち、あなたが所持しているものを全て記入してください。
実用英語技能検定試験（英検）　＿＿＿級合格
国連英検試験　＿＿＿級合格
実用仏検　＿＿＿級合格
TOEIC　＿＿＿点
TOEFL　＿＿＿点
ドイツ語検定＿級（Zertifikat Deupchals Fremd-sprache）
ドイツ語検定＿級（オーストリー検）
中国語検定試験＿＿＿級合格
ＨＳＫ　＿＿＿級合格
ＴＥＣＣ　＿＿＿点
その他,語学に関する資格・試験（　　）

III. 関西大学の外国語学習環境についてお答え下さい。

III-1.関西大学では、英語が必須科目になっています。これについてのあなたの意見を聞かせて下さい。（６にマーク）
①全面的に賛成する　②どちらかといえば賛成する　③あまり賛成しない　④全く賛成しない
また、そのように答えた理由を下の枠内に記述して下さい。

III-2.関西大学で、履修したい外国語はいくつありますか。（７にマーク）
①1つ　②2つ　③3つ　④4つ　⑤5つ以上

III-3.もし外国語が全て選択できると仮定すると、どんな外国を履修したいと思いますか。履修したい外国語について、履修したい順番に1番から順位を記入してください。
＿＿位　英語　＿＿位　ドイツ語　＿＿位　フランス語
＿＿位　スペイン語　＿＿位　ロシア語　＿＿位　中国語
＿＿位　朝鮮語　＿＿位　その他の言語（　　語）

III-4.現在選択している第二外国語は何語ですか。（８にマーク）
⑦を選んだ場合には、具体的な言語名をカッコ内に記入して下さい。
①ドイツ語　②フランス語　③スペイン語　④ロシア語　⑤中国語　⑥朝鮮語　⑦その他（　　語）

Ⅲ-5.現在選択している第二外国語の一番の選択理由はなんですか。（9にマーク）
⑦を選んだ場合には、具体的な内容をカッコ内に記入して下さい。
①趣味・教養として　②将来職業についた時，役に立つから　③現在の研究・授業に必要だから
④その言語文化圏に行きたいから　⑤その言語文化圏に関心があるから　⑥単位が取りやすいと聞いたから
⑦その他　（　　）

Ⅲ-6. あなたは、関西大学でネイティブスピーカーによるクラスを履修したいと思いますか。（10にマーク）
①はい　②いいえ

また、そのように考える理由を下の枠内に記述して下さい。

Ⅳ.あなたの英語習得度と目標についてお聞きします。

Ⅳ-1.関西大学では、どのような目標を持って英語を学びたいと思いますか。該当する番号を下記のA群から選び、下の枠内にすべて記入してください。また，いずれにも当てはまらない目標がある場合は、その他の欄に具体的な内容を記入して下さい。

（その他　　）

Ⅳ-2.自分の英語はどのレベルと思いますか。該当する番号を下記のA群から選び、枠内にすべて記入してください。また，いずれにも当てはまらないものがある場合は、その他の欄に具体的な内容を記入して下さい。

（その他　　）

A群

1.該当の言語・文化・社会について一般的な関心を持つ
2.一般的な会話などを聞いて理解できる
3.買い物程度の日常的な会話ができる
4.時事問題などについて話し合ったり議論したりすることができる
5.自分の専門についての講義・講演が理解できる
6.専門的または実務的な会話ができる
7.簡単な案内書などが読める
8.新聞の社会欄が読める
9.文学雑誌が読める
10.（辞書を使って）自分の専門に関する論文・著書が読める
11.平易な文を書くことができる
12.ビジネスレターを書くことができる
13.（辞書を使って）自分の専門に関するレポートを書くことができる
14.該当言語の検定や、資格中級程度を取得できる
15.該当言語は必要ないので、勉強しなくてよい

V. あなたの英語学習についての意見をお聞かせください。

まず、英語に関して、以下の文章が自分に当てはまっているかどうかを考えてください。そして、当てはまっている場合には４、どちらかといえば当てはまっている場合には３、どちらかといえば当てはまらない場合は２、当てはまらない場合は１を、指定された場所にマークしてください。

あてはまっている　・・・4
どちらかといえば当てはまっている・・・3
どちらかといえば当てはまらない　・・・2
あてはまらない　・・・1

V-1.英語の語彙を増やすためには、リーディングをするのが最も効果的である。（11にマーク）
V-2.英語をマスターするには、ネイティブスピーカーの先生に教わらなければならない。（12にマーク）
V-3.英語のコミュニケーション上達には、文法と単語の修得が必要である。（13にマーク）
V-4.英語をマスターするには、教室外での練習をしなければならない。（14にマーク）
V-5.英語でコミュニケーションを勉強することと、大学で勉強することとは違う。（15にマーク）
V-6.英語ができるということは、英語から日本語に翻訳することを意味する。（16にマーク）
V-7.英語の勉強には先生が文法と語彙を説明しなければならない。（17にマーク）
V-8.英語をマスターするには、苦労して頑張らなければならない。（18にマーク）
V-9.英語の語彙を増やすためには、単語を毎日覚えていくことをしなければならない。（19にマーク）
V-10.英語のリーディング上達には、訳読が最も効果的である。（20にマーク）
V-11.英語を用いている国の友達を作り、色々な人と親睦をはかり、交流したい。（21にマーク）
V-12.英語の語彙を増やすためには、日本語でも書物などから語彙を増やしていくことが大切である。（22にマーク）
V-13.英語の読み書きの方が、話したり聞いたりすることより役たつと思う。（23にマーク）
V-14.英語のリーディング上達には、多く読むことが最も効果的である。（24にマーク）
V-15.英語をマスターするには、文法の規則を規則として覚えなければならない。（25にマーク）
V-16.英語ができるということは、自分の関心のある分野で、雑誌などを理解し、簡単な手紙などを書くことを意味する。（26にマーク）
V-17.英語のライティング上達には、日本語から英語への翻訳が最も効果的である。（27にマーク）
V-18.インターネットなどを使って、英語で情報交換や、交流をしたい。（28にマーク）
V-19.自分は、将来、英語を使って仕事をする可能性が大いにあると思う。（29にマーク）
V-20.英語ができるということは、自分の専門領域で、英語の論文、学術雑誌を理解し、英語で論文などを書くことを意味する。（30にマーク）
V-21.クラスで日本人の学生と英語を話しても英語は上達しないと思う。（31にマーク）
V-22.英語をマスターするには、自信を持たなければならない。（32にマーク）
V-23.日本人なので、英語でコミュニケーションができることは必要でない。（33にマーク）
V-24.英語のコミュニケーション上達には、ネイティブスピーカーに教わることが必要である。（34にマーク）
V-25.英語を用いている国の文化を理解し、書物、映画、文学などの理解に役立てたい。（35にマーク）
V-26.英語のライティング上達には、英語の本・雑誌・新聞を多く読むことが最も効果的である。（36にマーク）
V-27.英語をマスターするには、英語のテープを聞いたり、ビデオを見たりしなければならない。（37にマーク）
V-28.英語の学習のためのホームステイや留学の機会があれば是非したい。（38にマーク）
V-29.英語をマスターするには、教室外での練習をしなければならない。（39にマーク）
V-30.英語のリーディング上達には、基礎の文法を勉強することが最も効果的である。（40にマーク）
V-31.英語のライティング上達には、基礎の文法を勉強することが最も効果的である。（41にマーク）
V-32.英語ができるということは、英語でネイティブスピーカーとコミュニケーションができることを意味する。（42にマーク）
V-33.英語をマスターするには、書物、新聞などからの一般知識を深めなければならない。（43にマーク）
V-34.現在の英語の授業に満足している。（44にマーク）
V-35.英語の授業の満足度について、V-34においてそのように判断した理由を記述して下さい。

VI. あなたの第二外国語学習についての意見をお聞かせください。

まず，第二外国語に関して、以下の文章が自分に当てはまっているかどうかを考えてください。そして、当てはまっている場合には4、どちらかといえば当てはまっている場合には3、どちらかといえば当てはまらない場合は2、当てはまらない場合は1を、指定された場所にマークしてください。

あてはまっている　・・・4
どちらかといえば当てはまっている・・・3
どちらかといえば当てはまらない　・・・2
あてはまらない　・・・1

VI-1.第二外国語の勉強には先生が文法と語彙を説明しなければならない。（45にマーク）
VI-2.第二外国語を用いている国の友達を作り、色々な人と親睦をはかり、交流したい。（46にマーク）
VI-3.インターネットなどを使って、第二外国語で情報交換や、交流をしたい。（47にマーク）
VI-4.第二外国語ができるということは、自分の専門領域で、第二外国語の論文、学術雑誌を理解し、第二外国語で論文などを書くことを意味する。（48にマーク）
VI-5.第二外国語をマスターするには、ネイティブスピーカーの先生に教わらなければならない。（49にマーク）
VI-6.第二外国語をマスターするには、文法の規則を規則として覚えなければならない。（50にマーク）
VI-7.第二外国語をマスターするには、第二外国語のテープを聞いたり、ビデオを見たりしなければならない。（51にマーク）
VI-8.第二外国語をマスターするには、教室外での練習しなければならない。（52にマーク）
VI-9.第二外国語をマスターするには、苦労して頑張らなければならない。（53にマーク）
VI-10.第二外国語のリーディング上達には、基礎の文法を勉強することが最も効果的である。（54にマーク）
VI-11.自分は将来、第二外国語を使って仕事をする可能性が大いにあると思う。（55にマーク）
VI-12.第二外国語のライティング上達には、日本語から第二外国語への翻訳が最も効果的である。（56にマーク）
VI-13.第二外国語の学習のためのホームステイや留学の機会があれば是非したい。（57にマーク）
VI-14.第二外国語の語彙を増やすためには、単語を毎日覚えていくことをしなければならない。（58にマーク）
VI-15.第二外国語の語彙を増やすためには、日本語でも書物などから語彙を増やしていくことが大切である。（59にマーク）
VI-16.第二外国語をマスターするには、書物、新聞などからの一般知識を深めなければならない。（60にマーク）
VI-17.第二外国語のライティング上達には、基礎の文法を勉強することが最も効果的である。（61にマーク）
VI-18.第二外国語のコミュニケーション上達には、文法と単語の修得が必要である。（62にマーク）
VI-19.第二外国語の読み書きの方が、話したり聞いたりすることより役たつと思う。（63にマーク）
VI-20.第二外国語をマスターするには、自信を持たなければならない。（64にマーク）
VI-21.第二外国語でコミュニケーションを勉強することと、大学で勉強することとは違う。（65にマーク）
VI-22.第二外国語の語彙を増やすためには、リーディングをするのが最も効果的である。（66にマーク）
VI-23.第二外国語のリーディング上達には、多く読むことが最も効果的である。（67にマーク）
VI-24.第二外国語のライティング上達には、第二外国語の本・雑誌・新聞を多く読むことが最も効果的である。（68にマーク）
VI-25.第二外国語のコミュニケーション上達には、ネイティブスピーカーに教わることが必要である。（69にマーク）
VI-26.クラスで日本人の学生と第二外国語を話しても第二外国語は上達しないと思う。（70にマーク）
VI-27.第二外国語ができるということは、第二外国語から日本語に翻訳することを意味する。（71にマーク）
VI-28.第二外国語をマスターするには、教室外での練習をしなければならない。（72にマーク）
VI-29.日本人なので、第二外国語でコミュニケーションができることは必要でない。（73にマーク）
VI-30.第二外国語ができるということは、第二外国語でネイティブスピーカーとコミュニケーションができることを意味する。（74にマーク）
VI-31.第二外国語ができるということは、自分の関心のある分野で、雑誌などを理解し、簡単な手紙などを書くことを意味する。（75にマーク）
VI-32.第二外国語を用いている国の文化を理解し、書物、映画、文学などの理解に役立てたい。（76にマーク）
VI-33.第二外国語のリーディング上達には、訳読が最も効果的である。（77にマーク）
VI-34.現在の第二外国語の授業に満足している。（78にマーク）
VI-35.第二外国語の授業の満足度について、VI-34においてそのように判断した理由を記述して下さい。

Ⅶ.関西大学での外国語教育について、意見、希望を書いてください。

授業の進め方・教材・教室・視聴覚・コンピュータ等の設備・大学の方針（必須科目、単位数、選択制など）など、どのようなことでも結構ですので、自由に記述して下さい。

＜ご協力ありがとうございました。＞